11/11 朝日

「もんじゅ直下に活断層」新説

「見落とし」指摘 学会で発表

廃炉になった高速増殖原型炉「もんじゅ」（福井県敦賀市）をめぐり、建物直下を活断層が通るとの新たな説を、中田高・広島大名誉教授らが10日、福岡市で始まった日本活断層学会で発表した。敷地内には核燃料が保管され、試験研究炉の新設も計画されていることから、十分な地震対策を取るよう訴えた。

もんじゅ直下の断層はこれまで、活断層ではなく古い時代のものとされてきた。原子力規制委員会の有識者会合も2017年に、活断層の証拠はないと判断していた。

中田さんらは、周辺の細かな地形を見直して、規制委などの公表資料を精査。もんじゅの西を南北に走る活断層「白木（しらき）―丹生（にう）断層」が、もんじゅがある北東方向へと曲がり、直下の断層とつながる可能性が高いとした。

活断層のずれで生じる谷の屈曲や段差状の地形が連続し、地質調査で断層が現れた場所と重なるなど、活断層を疑わせる証拠がいくつもあるという。白木―丹生断層が真北の海域にのみ延びるとの思い込みが、北東方向の「見落とし」につながったとの見方も示した。

中田さんは、規制委の有識者会合でも関連する指摘が出ていたのに、検討が不十分だったと批判。「誤りに早く気付くべきだった」と自らの反省も表明した。

もんじゅ運営主体の日本原子力研究開発機構は「有識者会合で評価いただいているので、現時点で対応は考えていない」としている。

（編集委員・佐々木英輔）